

三上朋子

言の葉の芽

目覚めようとしている 季節の変わり目
かつて育み 愛おしんだはずの 言の葉の芽
ほかの誰でもない わたしだけの かけがえのない言葉の数々

今ふたたび 研ぎ澄ます ころの声に
今ふたたび 見極める わたしの中に 詩^{うた}があるかを
凝らして見つめる 奥深く 言葉の泉にひろがる波紋を

年月だけが過ぎてゆき 顧みられない言葉の泉は いつしかすっかり干上がった
散り散りになった 言葉の数々
掬えずにおわった 言葉の波紋

自分の言葉を抱くこと
いま一度 抱きしめてみる わたしのなかにあっただはずの 小さな芽
とらえてみたい いま一度
とりもどしたい もう一度

試みてみたい 干上がった言葉の泉に 水を汲みいれ
止まっていた 言の葉の芽吹きが よみがえり生きること